59

『五輪砕』の検討

遠藤次郎・中村輝子
東京理科大学薬学部

福島県立博物館で会津中央病院の寄託資料を調査した折、『五輪砕』と題す医書を見出した。本書は八丁より成り、主に仏教色の強い絵が記されている。『五輪砕』は国書総目録では謡関連のもののみで、医書類は存在しない。本書の内容を検討した結果、表題は違っていても、内容が近似する医書が数多く存在することが明らかとなった。本発表では『五輪砕』の内容を検討するとともに、関連医書との共通点、および、それら医書群の意義を検討した。

『五輪砕』の内容はその名が示すように、五輪の塔が地水火風空の各要素（五大）に解体し、五臓や五体などの身体が形成される過程を図式的に示している。はじめに五輪塔図（①）、次に仏頭における七竅図（②）、五臓図（③）を描き、五大の要素ごとに線で繋いでいる。また、背骨の図（④）と五大の色体表（⑤）、六腑図（⑥）、皮脈肉筋骨や七竅図（⑦）を線で繋いでいる例もみられる。この他、五輪塔の前に梵字の「阿」字（⑧）、または「眼」字を大きく描き、文字を解体して五輪塔の五大の要素と繋ぐ例も見られる。また、三焦が特に注目されており、解説または図が描かれている（⑨）。本書の中にはみられないが、関連した医書の中には、最後に人体内に住む数多くの空想上の虫の図（⑩）を載せることが多い。

演者らがこれまで見てきた中で、以上述べた『五輪砕』の内容（マルで囲った数字）と近似した内容を持った医書を以下に示した。

1.『五輪砕并病形』（宗田文庫蔵、『図録日本医事文化資料集成』第四巻収載）、成立年不明（①③②⑥⑩の順に掲載。以下、同様）。

2.『医家秘法・解剖図』（杏雨書屋蔵、乾六五八七）、『圓覚経』（同、研一四六三）、一五五七年頃成立？（⑤⑧①②③⑥④⑦⑩⑨）。

3.〔永正解剖図〕（『明治前日本医学史』第二巻七一

頁）、一五一三年（⑤③④⑦②）。

4．『五臓之守護并虫之図』（九州大学医学部図書館蔵）、成立年不明（③⑥⑩⑨）。

5．『針聞書』（九州国立博物館蔵）一五六八年（③⑥⑩）。

6．『安西流馬医伝書』（三井高孟蔵、『図録日本医事文化資料集成』第二巻所収）、一四六四年、『安西流馬医絵巻』（信州大学農学部図書館蔵）、一五七九年（「五輪砕」⑤①③⑧②⑦⑨）。馬の五輪砕の例で、これらについては松尾信一氏により、一〇六回医史学会総会で詳細に発表されている。

以上に挙げた『五輪砕』関連の医書の他、室町末期にかけて流行した曲舞謡の資料が存在する。内容は上述の医書群の内容と近似し、懐胎十月の胎児の形成過程を五輪を中心に展開させている。この謡にみられる『五輪砕』は医書にみられる『五輪砕』の見方が大衆化したことを示す例ということができよう。

『五輪砕』にみられる医説の大きな特徴は仏教医学を基本としながらも漢方の医論をうまく取り込んでいる点である。たとえば、漢方医学では五臓を中心に考えるので中枢の概念は乏しい。これに対して、仏教医学では中枢の概念は明確である。『五輪砕』では「阿」という哲学的な観念（⑧）が頭部（②）からスタートし、脊髄（④）を介して五臓六腑（③⑥）や皮肉筋骨（⑦）へと展開することを示している。これらの図を仔細に検討すると、図を作るに際して、漢方における五臓論や鍼灸医学の背兪穴（脊柱両側に存在する五臓六腑に関連するツボ）の理論をたくみに応用していることがわかる。ここにみられる説は今で言う脳、脊髄の中枢神経系に極めて近い。この他、三焦論においても仏教医学と漢方医学がたくみに融合され、高度な医論を形成していることがわかる。仏教医学は漢方後世派の台頭とともに表舞台からは姿を消していくが、土着化する形で定着していったとみられる。日本人が「疳の虫」や「腹の虫」などの虫を好むのも、『五輪砕』をはじめとする仏教医学の影響といえよう。